

環境問題の意識の高まりのなかで、今まで廃棄されていたものを再利用したり、再資源化する動きがますます活発になっていますが、アートの世界と融合する動きが生まれてきています。札幌と釧路での取り組みをご紹介します。



前田森林公園でのパオ風造形物の制作風景。



赤井川村のホテル前庭にあるオブジェ。

ごみアートからまちづくりへ

'96年に結成されたゴミ造形団は、「ごみと親しむ」をモットーに、造形作家・松本純一氏の提唱で結成されたモノづくり集団です。空き缶、ボルトなどの廃材、針金の洗濯ハンガーなど、今まで捨てられていたものを利用して造形物をつくるという、ごみからアートを制作する活動を行ってきました。それとともに、モノをつくる楽しさを通じて、環境問題の大切さを考える活動を目指して、札幌を中心にいろいろな取り組みを行ってきました。市民参加型のアートイベントへの出展のほか、赤井川村のホテルの前庭を舞台に、鉱山のトロッコなどの廃材を利用したロボット風のオブジェ作成、札幌市前田森林公園での枝打ち材によるドーム型のパオ（モンゴル遊牧民のテント式家屋）に似た造形物の作成など、作品もユニークな顔ぶれです。メンバーはアーティスト志向の若者のほか、環境問題に興味のある人、友達づくりが目的の人、まちづくりに興味のある人などさまざまな人たちが構成されています。

年に1、2回の大きな出展活動を続けていたゴミ造形団ですが、去年は単にアート作品をつくるということだけではなく、今までの活動とまちづくりが一体となった取り組みにチャレンジしています。江別市野幌を舞台にしたイベント運営です。リサイクル素材の国際デザイン大会「デザイン・リソース・アワード」の受賞作を展示する「記憶のデザイン展」と、ゴミ造形団と野幌商店街、住民などが参加してごみからアート作品を制作し展示した「GOMI達のメッセージ展」です。デザイン・リソース・アワードは、資源を有効活用するための優れたデザイン提案に対して賞を与える国際コンペティションで、その展覧会が日本にくることを知った環境問題に関心

アートとリサイクル



珈琲袋をリメイクしたフラッグ

のあるメンバーが、なんとか北海道で開催できないかと考えたのです。江別市は大都市・札幌に隣接し、市内には工業団地などもあることから、地域でつくったものを地域で再加工し、再利用するという地域循環の視点からも今後への展開が期待できます。さらに、空き缶回収やリングプルを集めて車椅子を贈る運動などに取り組み、環境問題への意識が高い野幌商店街の存在もあったことで「記憶のデザイン展」だけでなく、野幌駅から公民館を結ぶ約400mの通りに面した野幌商店街で「GOMI達のメッセージ展」を開催することになったのです。両イベントとも4月21日～30日までの短期間でしたが、メッセージ展では、商店街や地域の方が一緒に造形団のメンバーと作品を制作するなどの成果もあり、大小合わせて40点の作品が展示されました。例えば街路灯に取りつけられたフラッグは、商店街の珈琲店から譲り受けた珈琲袋をリメイクしたもので、商店街の奥さんが作品づくりに取り組むなど、ゴミ造形団との連携プレーでできあがった自慢の作品です。野幌商店街では、空き店舗を改修しメッセージ展のメイン会場となった「ギャラリーNOPPO」をイベント後も常設し、コミュニケーションスペースとして、まちづくりの拠点に位置付けています。

釧路・エコアートへ波及

ゴミ造形団のこの取り組みは、はるか東の釧路に波及していました。

釧路では、一昨年から24時間かけて釧路のまちづくりを考える「チャレンジくしろ24」というイベントが開催されています。さまざまなイベントを行うなかでまちづくりを考えていこうというねらいで、ユニークなイベントが市内の数カ所で開催されます。この取り組みにかかわっている地元新聞社の記者・佐竹直子さんは、通常のイベントであれば参加者はいつも同じ顔ぶれ。何とか、今までまちづくりにかかわったことのない、地域に眠っている新しい人材を呼び起こすことが出来ないだろうかと、「一人称で参加できる場をつくろう」と、一昨年は若者がお年寄りを変身させるおじいちゃんとおばあちゃんのファッションショーを企画しました。そして昨年、これに代わる新たな企画を模索しているときに、江別市野幌でのリサイクルアートを知ったのです。そして「チャレンジくしろ21」の目玉イベントとして、9月16、17日、釧路駅前のラルズビルで「エコアート」と題した、廃棄物からつくられたアート作品の展示会を開催するに至りました。

このねらいは、あくまでも地域で眠っている人材が主体的に参加できる取り組みであったわけですが、廃棄物をアートに変身させる醍醐味もあり、呼びかけに応じて、作品制作には地元釧路公立大学美術部の学生を中心に社会人など、10～30歳代の約30人が参加しました。今まであまりまちづくりに興味がなかった若い世代の参加があったことや、ごみに対する視点が変わったという参加者も多く、成果は上々でした。

釧路でのこの取り組みには、後日談があります。イベント終了後の作品の行き場です。「作品を処分するのであればエコアートにならない」と佐竹さんは考えていたのです。しかし、イベント終了後は継続して展示できるスペースはなく、廃棄処分になっ



「チャレンジくしろ24」のエコアートの制作風景。



使用不可のCDを使って作られた「北海道」。現在、釧路駅に展示されている。

てしまうところでした。ところが、それを知った駅前商店街がショーウィンドウに設置、その後、釧路消費者協会が展示期間をエコアート作品展示に譲ってくれ、さらにこの経緯を知った釧路駅の駅長がほとんどの作品をJR駅に設置することを提案してくれたのです。作品に対する熱意や思いが地域の人々に認められ、またこうした経緯によって、エコロジーやアート、若者の活動への市民の理解が増幅し、エコアートの取り組みの思わぬ成果が生まれたのです。

まちづくりに生かす視点

廃棄物でつくった作品はその後どうするのか。この点はゴミ造形団でも同じような悩みがありました。作品の多くは引き受け先が見つからず、結局はごみに返していました。また、現在、ゴミ造形団は活動を休止しています。この点についてゴミ造形団の事務局長を務めていた白鳥健志さんは「ゴミ造形団にはいろいろな目的をもった人がいましたが、それぞれが関心のある舞台に活動の場を移し、積極的に造形団活動を行おうとするメンバーがいなくなったからです。また、私自身、作品をごみに返す虚しさを感じるようになったこともあります」と言います。ゴミ造形団でのこうした経緯は、啓蒙的な活動を超えたりサイクルとアートの融合には、作り手側と受け手（市民側）のアートとリサイクルへの深い理解が求められているように思えます。

しかし、白鳥さんはこうした経験を経て、その後も野幌商店街にかかわり、モノづくりの楽しさをまちづくりにつなげようと、独自にさまざまな活動に取り組んでいます。昨年夏には、地域住民を巻き込んで、廃棄物を利用した商店街の看板づくりコンテストを開催しました。白鳥さんは「まちづくりとアートの関係は、

スタートラインの協調性づくりや、コミュニケーションの活性化の手法として適していると考えています。モノづくりの楽しさを通じて、下手でもいいから地域住民が主体的に参加できる、そんな取り組みを進めていくことが真の住民主体のまちづくりにつながると思っています」と、これまでの活動をまちづくりに生かす方向を見いだしています。

アートをまちづくりにどう活用するかは、地域が考え、地域の視点で組み立てていくことが重要のようです。また、リサイクルとアートとまちづくりが結び付くには、まだまだ超えなければならないハードルもあるようです。



昨年夏に野幌商店街で行った看板コンテスト（上）。モザイク状に切った木に布を貼り、色を組み合わせさせて首里城を描いた。この沖縄料理店の看板は準グランプリを獲得。